



大阪商業大学

## FD ニュースレター

第5号

2009年12月発行

## 「わかりやすい」授業の功罪

総合経営学部 公共経営学科 准教授 永井 久晴

私は正式に大学教員に転じるまでは、大学での非常勤講師等の傍ら、約10年間司法書士を業としていた。司法書士の仕事は主に不動産の売買時や相続時等の登記申請手続きであるが、それ以外に自己破産の申立てや会社の設立、外国人の帰化・在留申請、訴訟手続等様々であった。ほとんどのクライアントが（日本の）法律の素人であり、基本的な法律用語すら知らない者にわかりやすく事案の内容を説明し、納得してもらうための工夫が常に不可欠であった。特に、実務の世界では「争続」と呼ぶぐらいに、相続絡みの案件は、金銭的問題に複雑な人間関係が混在し、少しでも対応を誤れば、收拾困難な事態を巻き起こす恐れがあり、常に細心の注意が必要だった。例えば、ある事件では、相続人が全国に散らばって総計17人となり、その中には生まれてから一度も沖縄から出たこともない100歳を超える女性もいた。沖縄の言葉だけを話し、実印という言葉すら知らないその方に、事案を説明し、理解してもらうのは非常に骨の折れる仕事であった。

その日々の中で身にしみたのは、「書く」ことの重要性であった。「口頭」での説明はどれだけ上手に行っても、相手がその場でどんなに納得したとしても、時がたつにつれて、不鮮明となり、思いもかけない齟齬が生じることがある。だから、必ず口頭での説明と共に、説明した内容をその場で全て紙に書いて、書いたものを読んでもらってから質問を受けることとした。そうすると、口頭での説明時には誤解していた思わぬ点が浮き彫りになり、そのまま放置していたら、あるいは後日に禍根を残したやもしれない事件を大過なく処理することができた場合が少なくない。また、相手に書いて渡したものは全てコピーを取っていたので、後日電話等で問い合わせがあった場合も、お互いにそれを参照して、やりとりができるため、非常にスムーズに進めることができた。

授業においても私は同じ方法を採用している。すなわち、学生をクライアントと考えて、「口頭での講義」に加えて「話した内容ほぼ全てを板書」し、更には「テキストの該当箇所を読む」という形で授業を行っている。つまり、学生は一つの範囲について「聴く・書く・読む」という形で3回学ぶことになる。それだけ「わかりやすい」授業となり、学生が確実に授業内容を習得し、国家試験に多くの者が合格するなど目に見える形で結果も出る。概して学生受けも良く、授業を行う本人も気分が良い。まさに良い事づくめのようなものである。

一般に、実務家上がりは「わかりやすい」授業が得意な者が多く、私など足下にも及ばないノウハウを持った名人がいくらでもいる。確かに、学力が低下したとはいえ、日本語はおろか英語もほとんど通じない外国人のクライアント等にレクチャーすることに比べれば、一応日本語が通じる学生にわかりやすい授業を行うことなど、さしたる難事ではないとも言える。

仮にFDが、「わかりやすい授業」＝「絶対善」とするならば、少なくとも一部の授業においては、容易に大きな成果を上げることが可能だろう。

しかしながら、「わからせる」事を過度に重視することは、長い目で見た場合に、学生にとって大きなマイナスとなる事もある。例えば、ある企業の幹部研修で民事法務の講義を行った時には、受講者からの評価やアチーブメントテストの成績は同研修において過去最高（基準点以上の者が例年の3倍以上）となり、人事担当者も大喜びしたが、私の講義を見学した役員の一からは「幹部研修としては、過保護すぎる。口頭で説明してわからない者は、本人の努力・能力不足に過ぎず、切り捨てるべきだ。」と、手厳しい批評を受けた。実社会では誰もわかりやすい説明などしてくれないし、教わってもない事をせねばならない事も珍しくない。「わかりやすい」授業ばかりを受けて社会に出た学生は、このような社会の厳しさに対応できないだろう。真に学生の事を考えるならば、「わかりやすい」授業を研究する以上に、「わかりにくい」授業から逃げずに粘り強く取り組めるように導く事こそが肝要となる。

そう考えた場合、学生にその意義を十分に説明した上で、時にはあえて「わかりにくい授業に変える」という授業「改善」も必要となるのではないだろうか。美味しい肉のような「わかりやすい」授業と、美味しくなくても栄養価の高い野菜のような「分りにくい」授業の両方がバランス良く配分されている事が理想のカリキュラムであり、FD研究は、最終的にはその配分の黄金比の発見を志向するものでなければならないと私は思料する。

FD委員会の端に名を連ねる者として、今回御指名に与って、無知・浅学の身を省みず、以上のように雑感を述べさせていただいたが、今後も本学のFD推進のために、微力ながら力を尽くしていければこれに勝る喜びはない。

## ■目次■

- P. 1 「わかりやすい」授業の功罪  
総合経営学部 公共経営学科 准教授 永井 久晴
- P. 2 公開講義を終えて  
経済学部 経済学科 講師 谷山 英祐
- P. 3 公開授業を終えて  
総合経営学部 商学科 講師 中嶋 嘉孝
- P. 4 公開授業を終えて  
総合経営学部 経営学科 講師 林 幸治
- P. 5 平成21年度新任教員との懇談会が開催される  
教務課 鈴 加奈子
- P. 6 2009年度ベネッセ大学支援フォーラム参加報告  
総合経営学部 公共経営学科 教授 木村 雅文
- P. 7 「学生FDサミット2009夏」に参加して  
総合経営学部 公共経営学科 講師 横見 宗樹
- P. 8 編集後記

## ■公開講義を終えて

経済学部 経済学科 講師 谷山 英祐

お忙しいなか私の拙い講義を参観してくださり、ご指導いただいた先生方に御礼申し上げます。また、講義を勉強させていただいた前田和彦先生、中嶋嘉孝先生にも御礼申し上げます。さらに、通常の講義とは異なる時間配分を（結果的に）強いることになった学生諸君にお詫びしたい。

今回、FD活動の一環として公開講義を行ったが、非常に勉強になった点から申し上げたい。先にお名前を挙げた先生方の講義を拝聴させて頂き、とても教えられるところが多かった。お二方とも学生を講義に参加させる、あるいは聞かせようとする努力をされており、まったくそのような努力をしていない私にとっては貴重な経験となった。

さて、「まったく努力をしていない」という表現を用いたが、もちろん私自身はできる限りの努力をしているつもりである。しかし、近年のFD活動によって、この教員の「努力しているつもり」という自己評価は無意味なものになった。ここでの評価は、お客様である学生のアンケートから得られた結果がすべてである。私自身について言えば、一連の学生アンケートから得られた結果から判断する限り、私は無能教員以外の何物でもないであろう。教育サービス業の従事者として給与を得ている以上、この事実は厳粛に受け止めなければなるまい。

では、私の最大の欠点はなんであろうか。ドラッカーの著作や1960年代の消費者運動以後に注目されるようになった顧客満足度（CS）という概念を簡単に振り返ると、顧客満足度を測る際に重要とされるのが、顧客の期待（E）と製品・サービスのパフォーマンス（P）である。従って、顧客の満足度が高い、という状況はE<Pのときである。つまり、講義におけるCSを高めようとするならば、学生のEを理解する必要がある。しかしながら、私はこのE、学生がなにを求めて講義に出席しているのかをまったく理解・把握できていない。学生と直接会話ができる演習等のゼミを通じて、学生のニーズ・期待を把握しようと努めているが、未だ把握していないのが現状である。

90年代後半以降、One to OneマーケティングやCRMなる言葉を盛んに聞くようになった。従来のマス・マーケティングではなく、個別の顧客情報を管理することできめ細かい、かつ持続的なマーケティングを行うものである。さきに述べたように、演習等のゼミ形式の場合には、ある程度の把握は可能であるし、ゼミの内容もその都度変更することも可能であろう。しかしながら、今回、公開講義をした一般経済史のような講義形式の場合には、やはり困難であると思われる。また、個別マーケティングの際には、顧客の選別もまた重要な作業となる。しかし、これまでその機能を担ってきた（と思われる）入学試験は、大学全入時代を迎えた今、実質的には機能していないであろう。以上の点を踏まえて私自身の改善点を挙げるとすれば、まず、学生がなにを求めて講義に出席しているのか、という点を把握すること、といえよう。

## ■公開授業を終えて

総合経営学部 商学科 講師 中嶋 嘉孝

2009年11月26日、2時限目の担当科目である「製品戦略論」を公開授業とし、先生方に御参観頂いた。その後の意見交換会における御意見、学生へのアンケートを通じ、これまで教育哲学と実際の間さまざな改善すべきところが必要であると認識した。

まずこれまで取り組んできた教育哲学を述べることにする。私が教育する上でモットーとしてきたことは、理論を学習した



(写真・上) 公開授業の様子

後に実際に企業経営においてどのように実行されているかを身近な例を使い指し示すことである。なぜなら一般の学生は、文字だけの情報により、理論の意味を理解することは難しいといえ、それはテキスト、参考書等があっても同様のことである。だからこそ学生に対して、身近な例として新聞記事などはもちろんのこと最新の事例を映像やパワーポイントに画像を取り入れることにより、理解が深まるのではないかと考えている。そして学生は事例から理論を連想し、知識に修得につながるのではないかと考えている。これこそが勉強の面白さや経営学のダイナミズムをつかむことができると考えている。それは本学の建学の理念「世に役立つ人物の養成」につながり、「基礎的実学」を身につける上で重要であると考えている。大学を卒業し実社会に必要なこととして実学が要求される。しかし実学におけるさまざまな問題に対して答えを導くのが理論的枠組みであり、理論と実学の融合を第一として指導していきたく考えている。

このような観点から、学生に見やすく、そして理解しやすい文字や映像を現すために、今回の公開授業のみならずすべての授業においてパワーポイントを採用している。しかし公開授業を通じていくつかの問題が明らかになった。そこでパワーポイントの長所、短所を改めてまとめてみた。

(写真・下) 公開授業後の意見交換会の様子



<長所>

- ①黒板に書く、消すなどの手間が省ける。
- ②個人特有の読みにくい文字を見やすくすることができる。
- ③表やグラフ、画像などを明確に表現できる。
- ④強調したい部分は太字や色を使い自在に変えることができる。
- ⑤上記をクリックで可能なことから、説明に集中することができる。

<短所>

- ①セッティングに時間を要する。
- ②パソコンやプロジェクターにトラブルが起こる恐れがある。
- ③日中の授業など文字が見にくい。
- ④スライドを早くするとノートがとれない。
- ⑤教室内の明かりを暗くするので学生の睡眠を誘いやすい。などがあげられる。

このようにパワーポイントは長所が教員側に多く、学生側には少ないことが分かる。そのようなことが今回実施した授業アンケートの中からも読み取れた。学生の数人から短所④にあるような苦情が見られ、すべてのスライドを印刷し配布してほしいとの要望があった。私の授業ではスライドの重要個所だけを抜粋し、他は配布するようにしていたため、このような要望が見受けられた。他の個所はどこが重要なかを学生それぞれの判断により、メモを取ってもらえば大学生の授業を想定していたが、これらの想定が高度であることが分かり、今後学生の意見を聞きながら進めていきたいと考える。

つぎに成績評価の方法として、定期試験、課題などの他に授業への取り組み度合いを測るようにしている。具体的には学生の学習態度を見るために、ミニットペーパーを毎時間実施している。このペーパーは授業中に関連する質問を黒板に板書や明示せずに行い、答えてもらうものである。これにより授業への取り組み度合いを見ることができると考える。同時に本授業のまとめ、そして授業への質問、要望を記入してもらう。またこれらの内容を箇条書きにするだけではなく、文章化することを奨励し、文章力を修得させている。そしてそのペーパーに記入された質問、要望を次の授業時にフィードバックするようにしている。

最後に今後は科目に関しての指導に加え、幅広い経営、経済に関する知識を修得させ、最新の問題、事例にも対応した広い視野を身につけるようにさせたい。また人として必要な思いやりと礼節をわきまえ、楽しい生き方を送ることのできる教養を身につけた

社会人となるべく、いっそうの授業の改善、そして学生にとって満足度、理解度の向上に邁進していきたい。

## ■公開授業を終えて

総合経営学部 経営学科 講師 林 幸治

11月26日木曜日2限の「簿記原理」の講義を公開授業として行った。本講義は、簿記3級程度の知識習得を目標とする総合経営学部1年次配当の通年・必修科目である。履修者は55名であり、商業科出身といった高校時代にすでに簿記を学習した者と普通科等出身で簿記には全く触れたことのない初学者とが混在している授業である。

本講義ではテキストを1冊使用し、その内容を簡易にパワーポイントでまとめて講義を行う形式を採用している。パワーポイントでスライドを作成するにあたり、テキストの該当箇所をまとめるだけではなく、初学者でも理解しやすい平易な言葉を用いるよう心がけている。その日の重要な項目を「今日のポイント」として最初に提示し、何を学ぶかを明確化している。授業は基本的な概念とその仕訳を理解することを第一とし、簡単な例題を提示し解くことで理解を深めるようにしている。また、パワーポイントに関しては、一切ハンドアウトを渡さずに、映し出したスライドを手書きでノートに写させている。簿記は何度も問題演習を行うことが理解の第一歩であると考えており、その基本的な作業として、学生が自分で手を動かしノートを完成させるように指導を行っている。ノートをとることで記憶の定着が図られると同時に、今後の大学生活の中で必要なノート作りの習慣を身につけてほしいという願いも込めている。例題だけで不十分な部分は、演習問題を別途配布し、授業内で可能な時はその場で解答させ、学生を指名して黒板に解答を書かせ解説を行う。授業内に時間がない場合は宿題とし、次の授業開始時に学生を指名し黒板に解答を書かせている。これは学生の理解を深めることはもちろんであるが、授業に少しでも参加させることで学生が授業に集中するように行っている試みである。

公開授業として行った講義の内容は「減価償却」についての概念と仕訳、減価償却を行った固定資産の売却時の仕訳である。第23回を数える授業であるため、本講義は決算整理事項の仕訳を順次学習している段階であり、精算表の作成に向けた準備段階という位置づけである。公開授業の流れは以下の手順で行った。まず、減価償却の概念を理解するための基本的な事柄を身近な車の価格を用いて説明した。新車と数年使用した中古車とを比較した際、その「価格」が年を経ることで減少することを事例とし、企業内の機械や建物等の固定資産も経年劣化することを関連付けてイメージさせた。続いて、価値を減少させる減価償却の方法のうち、簿記3級相当の定額法を用いることを述べ、その方法を説明し減価償却費を算出させた。そして、減価償却累計額勘定を用いた間接法による仕訳と、間接法で減価償却を行った固定資産の売却時の仕訳を説明し、課題を次週までに解いてくるように指示し終了した。

今回の公開授業を行っての感想であるが、まず、授業のスピ



(写真・上) 公開授業の様子

ードがあげられる。今回の「減価償却」に関しては、理解がしづらい内容であり詳細に説明を行おうとしたためボリュームが多くなってしまい、その結果、授業の展開が早くなってしまった。授業後のアンケートでも学生から「今日は授業スピードが速かった」との指摘があった。私の授業形式では、1回の講義あたりスライド枚数が10枚前後になるように作成しているが、今回の授業では14枚となってしまい、授業スピードが上がってしまうという結果になった。学生に自筆でノートを取らせる方針であるため、ノートを取る時間と問題を解かせる時間の十分な確保が重要であると再認識した。次に授業を見ていただいた先生から「パワーポイントのフォントが小さい」というご指摘をいただいた。これまで28ptで作成していたが、434教室の後方でも見づらいとのご指摘であり、学生アンケートにも「字が小さい」というものがあった。見づらい学生は前に座るように指示をしているが、公開授業後はフォントを32ptにして改善を図ったところ、見やすくなったとの反応を得た。そのほか授業後のアンケートではスライドの誤字や1枚当たりの分量の指摘があったので改善していきたい。

今回、公開授業をご参観いただいた先生方から、授業方法について様々なご指摘をいただき大変感謝している。このような場を設けていただけると、授業方法について再確認ができる絶好の機会であり、また反省する契機にもなり今後の授業に活用できるものと考えている。授業の進め方、スライドの見せ方、問題演習と宿題の確認方法など、先生方と意見交換できたことも自分にとっては貴重な経験となった。

「簿記原理」に関しての次年度以降の課題であるが、初学者と簿記を学んでいる学生とが混在している中での授業の展開方法について、一層の工夫が必要であると考えている。大学に入学し意気揚々としている学生が、すでに学習済みである簿記の基本から講義を受けた際のモチベーションの低下をいかに防ぐかを留意していくことが課題であろう。学生に興味を持たせつつ理解を深める授業を行うよう、今後も鋭意努力していきたい。

最後になるが、大変お忙しい中、授業をご参観下さった先生方にこの場を借りて改めて御礼を申し上げます。

## ■平成21年度新任教員との懇談会が開催される

教務課 鈴 加奈子

7月15日、前田FD委員長と新任教員3名による、懇談会が開催された。本学で講義をして半期が過ぎ、各々が悩んでいることや困っていることなどについて、気軽な雰囲気の下で話し合いがなされた。

新任教員からは以下のような声が聞かれた。

### ◎大教室での講義について

- ・大教室での講義は毎回出席をとると明言し、遅刻に関しても厳しく指導している。履修者の半数程度が出席しており、彼らは非常に真面目である。
- ・大教室での講義には100名余りの履修者がおり、コンスタントに授業に出席している学生は40名程度である。当該科目は必修科目であるため、「この科目を4年生まで持ち越してしまうと就職活動にも影響が出る」と伝えても、現状では半数程度しか単位を認定できないような状況にある。危機意識がない学生が多いと感じる。
- ・授業中、後ろの方でたむろする学生や大声で話す学生がいる。「真面目に授業を受けている学生に迷惑をかけるのであれば出ていってほしい」と毎回言っているが改善されず、困惑している。
- ・授業はやりやすいと感じている。授業アンケートで「難しい」と回答する学生もいたため、方法は考えていきたい。

### ◎少人数クラスの科目について

- ・演習科目を担当している。25名いる履修者のうち、出席しているのは15名程度であり、1回も来ない学生もいる。そのような学生への対応に悩んでいる。
- ・自分が担当している演習を第2希望以降で選択した学生のモチベーションを向上させるためにはどうすればいいのか、悩んでいる。
- ・履修者全体のうち、出席者は半数程度であるが、出ている者は非常に真面目である。
- ・演習科目に関して、人数が少ないような状況であっても、話を聞かない学生が多い。レポートを課したり、教科書についても厳しく指導したりしているが、教科書を買ってこずに言い訳をするような状況である。



前田FD委員長より新任教員に、「参考になれば」とのことで、これまでの経験談や授業の進め方の一例について説明がなされた。

- ・ページ数が少なく、値段も手頃な教科書を選定する。それを用いて試験を実施する、教科書を使って勉強しないと成績評価に関わる、と明言している。
- ・演習科目では1人ずつ面談をし、記録をとっている。面談ではアルバイト、クラブの状況や、4年生であれば就職活動についても話を聞く。一人ひとりと面談することで顔と名前が一致するので、学生をとともかわいく思えるようになる。また、面談記録を残しておくことで、学生や保護者との関係が円滑に進むこともあった。
- ・大教室の講義では、マナーの悪い学生がいる。飲み物を出していることについては黙認することもあるが、帽子は脱ぐように厳しく言っている。寝ている学生は必ず起こし、再度寝てしまっても繰り返し起こす。場合によっては発言をさせることもある。
- ・大教室の講義の場合、意識的に板書を多くしている。プリントはあまり配らないので、学生にはとにかく写して、自分で考えるよう指導している。
- ・教材としてDVDなどを使用する際、機器の都合で見られない場合がある。そういった時は、事務局に申請すれば見られるように設定を変えてもらったり、メディアを変えてもらったりする(DVD→ビデオなど)ことも可能である。
- ・試験に関しては、学生が成績の確認を申し出る場合があるので、成績評価基準をはっきりさせ、記録をとっておく必要がある。



私自身も、事務職員として本学園に採用されてのち、先輩職員の方々と懇談する機会が与えられました。実際に働いていらっしゃる方の声を直接うかがうことができ、非常に心強く、新しい環境への不安が軽減されたことを覚えています。

今回開催された懇談会についても、新任の先生方にとって同様の意味を有するだろうことを望んでいます。

## ■2009年度ベネッセ大学支援フォーラム参加報告

総合経営学部 公共経営学科 教授 木村 雅文

2009年度は、四年制大学への進学率が初めて50%を超え、いわゆるユニヴァーサル段階へ到達した年として記録に残ることになった。そして、国公立大学の再編や私立大学の学部増による学生の困り込みも依然として活発である。しかし、その一方で、定員割れの深刻化のために、次年度からの募集停止の発表を余儀なくされた大学も数校現れている。

このように、これからの大学間の生き残り競争は、いよいよ熾烈さを加えるに違いない。幸いにして本学では、危機が差し迫っているわけではないけれど、今後の推移には楽観を許さないものがあるように思われる。そこで、今後の発展を図るためには、教職員が認識を共有しながら、運営・教育・研究に取り組まなければならない。とりわけ、新入学生の多様化している学力をどのように把握し、大学のカリキュラムに導いていくかが大きな課題になるのではないだろうか。これは、中堅校である本学にとって、きわめて重要である。

さて、私は、上記のような関心から6月26日(金)に大阪市内で開催されたベネッセ大学支援フォーラム「高大接続期の仕組み作り—学部教育の前提となる『大学生基礎力』の育成—」という集まりに参加することになった。定員100名という予定のようであったが、会場はそれ以上の出席者で満員であり、大学関係者の関心の高さか、あるいは悩みの深さを思い知らされた。当日の内容は、ベネッセのスタッフによる「09年度新入学生の現状報告と、ベネッセが考える『大学生の基礎力』」と「『大学生基礎力』育成のための施策と、ベネッセからのご提案」という2本の講演であり、質疑応答はなく、全体としてベネッセコーポレーションからの大学支援業務の紹介による営業活動という感が強かった。率直な感想として、最高学府である大学の教育が、民間営利業者の支援を必要とするような状況になっていることに違和感を持ったのも事実である。

しかし、内容的には、高校教員や生徒からのアンケート、大学新入生約75,900人を対象とした「自己発見レポート」や「学習力調査」をもとに充実したデータから説明がなされており、参考になる事柄も多かった。以下、簡単に挙げてみることにしたい。

- ①高校でも、「学習力」育成が進められているが、自立的な学習が達成されていない。これが、大学になっても及んでいない。
- ②新入生調査の結果をもっと活用して導入教育の指標を開発する必要がある。
- ③09年度大学新入生も、協調性や適応力のある「従順なツアーク」の性格を持っているが、説得力や創造的な態度が下がっている。
- ④そのため、授業を選択する力、授業に参加する力、授業から学ぶ力が十分ではない。



⑤大学生は、入試区分や学部系統で多様な特徴を持っており、学力が長方形分布化している。

⑥経済・経営の学部系統では、「進路条件の明確化」と「学びへの意識」の面に課題があるので、「自分と社会」や「自分と大学」とをつなぐようなワークをさせ、意識を明確化させる必要がある。

⑦学生に「学習力調査」を実施することで、学生の危険信号をつかみ、個人面談などでフォローすることができる

⑧教授会などでは、「学習力調査」から、当該大学や学部の学生の学力や意欲の実態の報告を受け、全国平均と比較するなどから、大学(学部)として認識を共有化し、教育指導実施の取り組みを図ることができる。

要するに、このフォーラムでは、⑦⑧に見られるように、ベネッセの開発した学力テストや新入生調査を利用すれば、その大学の新入生の実態が分かり、導入教育に役立つような資料が得られるというところに主眼が置かれ、必要に応じてアドバイスもすると表明していた。つまり、ベネッセの営業活動の一環であったから、客観的なデータを多用し、いかにも各大学にとって有用そうな説明がされたのである。しかし、これを利用した大学があったのなら、どのような施策が行われ、いかなる効果があったのかなどの検証が必要であろう。

いずれにしても、現在の大学における導入教育について多くの課題があることは事実としても、これが民間営利業者の積極的なマーケティングの対象になってきていることに今昔の感を深くしたことを記しておきたい。

## ■「学生FDサミット2009夏」に参加して

総合経営学部 公共経営学科 講師 横見 宗樹

近頃は学生によるFD活動というものがあるらしい。そう聞いて参加したのが「学生FDサミット」である。これは、2009年8月29日と30日の2日間にわたり、立命館大学衣笠キャンパスで開催されたものであり、26大学から約100名が参加した。

実は、学生がFDに参画するという取り組みは、既に他大学でも実施されている。たとえば、岡山大学では学生がシラバス作成に参画し、学生の声を反映する形で2009年秋から「知らないきゃババい大人のマナー」という授業を開講している。また、北九州市立大学でも、学生がカリキュラムを考えるという同様の試みをおこなっている。

学生FDサミットでは、全国の大学生と教職員が大学の授業や教育について共に考えることを目標としており、これだけの規模で、かつ大学をまたいで開催されるのは全国的にも珍しい取り組みである。まず会場に着いて気づいたのは、全ての運営を学生が実施していることである。受付から参加者の誘導、対談企画の司会まで、その全てが学生主体である。後で知ることになるが、このFDサミットのプログラム自体が学生による企画なのである。

さて、FDサミットが開会して、まずは参加者の自己紹介である。熱心な参加者が多いせいか、いずれもユニークな自己紹介である。午後からは「しゃべり場」と題した討論会である。希望するテーマ別にグループ分けがおこなわれる。学生、教員、職員が最低1名は入るように割り振られ、1グループあたり6～8名の構成となる。この「しゃべり場」はテーマを変えて3回実施される。翌2日目は、午後の「発表会」に向けたグループワークに朝から取り組む。これは、前日の「しゃべり場」の討議を踏まえて、グループごとに「提言」をまとめるものである。

既にお気づきであろうが、この2日間にわたるプログラムは全てが「参加型」である。息つく間もなく徹底的に討議に参加するのが、このFDサミット最大の特徴である。傍観は決して許されない。



下図は、「しゃべり場」のテーマ一覧である。小欄では、「授業アンケートって必要？ 何のため？」に参加した感想を取り上げる。そこでは、ちょっとした「予想外」を体験することになる。

①おもしろい授業—どんな授業？「おもしろい」とは？—
②こんな授業を受けてみたい！してみたい！
③授業みりよく発見！—正課授業の良いところ—
④へんな授業の改善法
⑤教養教育をどう思う？—より良い教養教育にするには—
⑥授業アンケートって必要？何のため？
⑦高校生から大学生へ—初年次教育を考える—
⑧大学で学生が身につけるべき力とは？
⑨キャリア形成につながる大学のサポートとは？
⑩“大卒”って何？—大学教育の質保証—
⑪学生・教員・職員が協力して良い大学を作るには？
⑫大きい大学、小さい大学、それぞれのメリットをメリットに変えるには？
⑬都市の大学、地方の大学、それぞれのメリットをメリットに変えるには？
⑭国籍を超えた大学での学び
⑮障害の有無にかかわらず大学で学ぶためどのような環境が必要か？

いまや授業アンケートは、本学はもとより多くの大学で実施されている。言うまでもないが、授業アンケートを取る目的は、「授業の改善点を見出すため」であろう。しかしながら、「しゃべり場」に参加した学生の反応は意外なものであった。ほぼ全員が授業アンケートを取る意味が分からないと言う。それゆえ、学生にとって授業アンケートは、ただ「面倒くさいもの」にしか映らないらしい。いままで、「学生のために」授業アンケートを実施していると思いついでいた身には、こうした反応は全く意外であった。

討議を深めていくにつれて、その理由が解けてきた。学生が授業アンケートの実施意義を理解できない理由は、アンケート結果が全くフィードバックされていないからだと言う。アンケートを取るタイミングに問題があるケースも提起され、たとえば最終回（もしくはその近傍）の授業でアンケートを実施したところで、当該年度の履修生に結果をフィードバックする術はない。「次年度の授業改善に役立つはずだ」と反論を試みても、やはり自分たちが書いたアンケートは自分たちに反映して欲しいのだと異口同音に主張する。

全般的な討議を通じて、ひとつの確たる感触が芽生えた。それは、授業アンケートに関する意識の相違にも見られるように、学生と教職員が互いに分かりあえていないことが意外と多いことである。これは授業アンケートに限ったことではない。

重要なのは、学生と教職員の意思疎通の場を用意することである。学生が教職員を誤解していることがあるように、教職員も学生を誤解していることがある。これを気づかせてくれたのが「学生FDサミット」である。

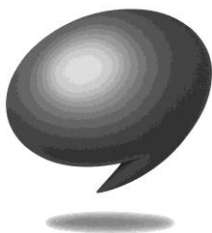
---

## ■編集後記■

年の暮れが押し迫って、ようやく FD ニュースレター第 5 号の発行にこぎつけることができました。今年度の FD 委員会では、従来からの活動にくわえて、公開授業の拡充ならびに新任教員との懇談などを工夫しました。もとより私たちの試みはきわめてささやかなものであることは承知していますが、それにもかかわらず各教員の講義にかける情熱と工夫、あるいはとまどいをお感じになっていることがよくわかりました。各先生方のお悩みになっている部分については、当委員会においてもできる限りの対応を進めたいと考えています。引き続きのいっそうのご協力とご支援を切にお願いするものです。(FD 委員会 委員長 前田 啓一)

手探りで何とか続けてきた FD ニュースレターの発行も、第 5 号発行を迎えました。ほんの少しずつですが、紙面にも改良を加え、少しでも皆様に読んでいただけるよう、これからも工夫してまいりたいと考えております。今年はインフルエンザが長期にわたり猛威をふるってきました。ウイルスに負けないよう、来年も頑張りましょう。今後ともよろしく願いいたします。(教務課 鈴)

---



大阪商業大学 FDニュースレター 第5号

発行日：2009年12月25日

発行：大阪商業大学FD委員会

〒577-8505 東大阪市御厨栄町 4-1-10

Tel 06-6781-8816 Fax 06-6781-8438